

生きかえった 「うたうたいのえ」

world 『月よわたしを唄わせて』 出版1周年記念Live

「うたうたいのえ」のオリジナル音源

あする恵子の朗読セッション

ゆかり対バン

鼎談

3月16日(土) 受付 5:00pm~

開演 5:40pm ~ 終演 9:30pm

(携帯電話は切り、上演中の入退場はなるべくご遠慮ください)



店舗入り口は井の頭通り沿いのドン・キホーテ向いにあります

【会費】 前売予約 3000円・当日 3500円+1drink order/zoom参加 2500円
(食事別途、カレーとパスタ、おつまみ数種もあります)

ライブハウス曼茶羅

〒180-0003 東京都武蔵野市吉祥寺南町1-5-2 内田ビルB1

電話：0422-48-5003 (JR中央線・京王井の頭線 吉祥寺駅南口より徒歩5分)

2008年秋に命を絶った「うたうたいのえ」の弾ける笑顔が、突き抜ける唄声が、底知れぬ生きづらさが、まざまざと伝わってくる一大ノンフィクション『月よわたしを唄わせて…“かくれ発達障害”と共に37年を駆けぬけた「うたうたいのえ」の生と死』出版1周年にあたって、かつて、のえをいち推した、のえゆかりのライブハウス曼茶羅で、「うたうたいのえ」worldを再発見する記念Liveを持つ。

のえが「うたうたい」として活動した、90年代から2000年代、20代から30代の、のえの映像と共に、のえのオリジナルソングの音源から特別に10曲を披露。

著者のあする恵子の本書の朗読あり、唄うような「声の演奏」あり。伴奏するSaxもパーカッションも聞き逃さない。

はたまた、末井昭さん、斎藤真理子さんというスペシャルゲストを迎えた鼎談では、みずから逝った大切な人もまた、生きに生きて輝いていたのだ、そしてそ

の記憶と共に、私たちは深い悲しみを胸に、灯りのような希望をもって生きていかれるのだというメッセージをこめる。

はるばるやってくる、のえゆかりのミュージシャン、かんちゃんのギターインストも、旅や路上の、のえとのエピソードも必聴。

登ってみなければ、その高さもはるかな眺望もわからない、とてつもない山のような本書のキーワードは、喪失体験、“かくれ発達障害”、マイノリティファミリー、日本の地方X県、そして、路上、トーキングブルース、声の力、一本の藁(わら) etc.

気づけば、のえという人生の近くにいて、人生を唄わずには生きていけない人たちに、今捧げたい魂のLive。

参加者の人生の転機となる、この本の醍醐味をこそ届けたい。戦争が地震などの災害が、日々を生きる営みを脅かす、世界と日本の今だからなおのこと…。

【記念Live 連絡先】 あする恵子

電話：090-2093-1739 (ショートメールOK、電話は昼以降) メール：penguin0211@hotmail.co.jp

前売予約→その旨とお名前と携帯番号を上記の連絡先へ。zoom申込→<https://coubic.com/berotei/>



出演者プロフィール (敬称略)

うたうたい のえ

オリジナルソングの音源 & 在りし日の映像

本書『月よわたしを唄わせて』の主人公。あする恵子のノンフィクションのみならず、急逝する前日まで書き継いだのえのブログの日記『お月様が見てるよ』と付属CD『赤い涙』からは、のえのリアルな声が伝わってくると評判だ。

この記念Liveでは、初々しい20代前半の東京での草創期から、「うたうたい」として少し落ち着いた30歳前後の京都時代、野宿者のテント村に居場所を見出した、のえらしさが突き抜ける晩年の大阪時代まで、10曲ものオリジナルソングを披露する。のえの笑顔や唄う姿との再会も嬉しい。

1970年新宿にて誕生。モダンジャズの大音響を子守唄に幼児期を首都圏、小中学校はあする恵子と岩国英子のもと、4人のキョウダイと共にX県の「ベロ亭」をかけずり回って育つ。

幼い頃から大好きな音楽を一人むさばり、15歳でベロ亭を出て東京から全国放浪、京都から大阪へと17年間、新宿東口の小ガード下をはじめ、路上を原点にオリジナル楽曲で異彩を放つ。いち推しされた東京『曼荼羅』をはじめ、京都『アザーサイド』『拾得』などのライブハウスでライブ多数。

居場所のない心の揺らぎを包み込む表現から、晩年には生きづらさに目を逸らさない唄う姿勢へ。魂を直撃する唄声が、プロアマを問わない多くのファンの共感を呼ぶ。

2008年秋、急逝。2009年4月から1年間、のえを惜しむ悼みの場「のえルーム」の営みが大阪で持たれる。



あする恵子

朗読と「声の演奏」& 鼎談

詩人、ものかき。『月よわたしを唄わせて』の著者で編者。72歳にして心身に折り合いをつけつつ、この出版記念Liveを手がける。原稿を弾ませる言葉選びも、破天荒な計画も、寝入りばなの心と脳に矢継ぎ早に訪れる。

首都圏育ちで高校卒業後、娘ののえ誕生。1977年にX県に移住、パートナーの岩国英子と5人の子どもたちと共に、古民家にベロ亭ファミリーを築いて40数年を数える。1981年より30年間、英子と共に『ベロ亭やきもの&詩キャラバン』を全国600か所で開催。企画を受け持ち、子どももろとも女二人で生き抜く自由であるがままの姿が全国の女たちを刺激する。1986年にキャラバンで自作詩朗読を始め、様々な楽器と組む。

2008年秋、娘ののえを喪う。喪失体験に向き合うべく、朗読の根幹の発声声が2014年に突如変化、英子の土笛と太鼓と共に唄う「声の演奏」へと深化させる。2014年長野県とX県で、2015年北海道で、2017年山陰で朗読イベント「再生のためのコラボ」を持つ。本書を世に出して1年、7年ぶりにこの記念Liveで声を出す。

現在Facebook『Matta虹』主宰。多くの人が目を背ける日本人の心のアキレス腱にアプローチする投稿を継続。本書と共に主宰する『リメンバーのえプロジェクト』では、「生きづらさをあるがままの豊かさへ」が合言葉だ。

かんちゃん＝菊池 久

ゆかり対バン

4章のI部の何か所かに心愉しく登場するミュージシャンが、一人営む居酒屋砂丘屋さんを休んで、はるばる鳥取からやって来る。曼荼羅で、のえと対バンした時代からも30年。どんなギターと、のえとの泣き笑いの思い出が聞けるだろうか。



末井 昭

Sax演奏 & 鼎談

昨年、末井さんによって青山ブックセンターでこの夏の一冊に。取材と執筆で10年かけた本書で「のえさんが生きかえった」といち推した。過不足ない推薦文がリアルでわかりやすく、店頭では平積み。

読み始めるとどんどん引き込まれ、読み終えて付属CDを聴いて、のえのことを昔から知っているような気持ちになったという。「月は知らんぶり」を聴いて涙が出ました。月からも見放された孤独感がものすごく伝わってくる。」また「5章の“かくれ発達障害”のことはリアルに参考になりました」とも。

ちょっと謎のような投げかけもある。「この本に書かれていることは、すべて心のことです。それがブレてなくて、非常に掴みづらいこともきっちり掴んでいることが、力を与えてくれるのではないでしょうか。」

60年以上前7歳で、過疎の岡山でお母さんをダイナマイト心中で喪ったことを心の芯に生きてきた。20代は東京の裏街道を破天荒に走り、1975年白夜書房の設立に加わり『写真時代』『パチンコ必勝ガイド』など10誌以上の雑誌を創刊した名編集者。退社後文筆に専念。著書に『素敵なダイナマイトキャンダル』(2018年に映画化)『100歳まで生きてどうするんですか?』この記念Liveで販売する『自殺』(講談社エッセイ賞受賞)など。病身でふれあいの少なかったお母さんのことは、遠くを見ながら「みんなフィクション」と言うのが口癖。

やさしく曖昧なことを曖昧なままに語るひょうひょうとした語り、この鼎談ではさてどんな笑いを誘うか。

伝説の『哀愁令和歌謡バンド・ペーソス』でテナーSaxを吹き、なんとこのLiveでは朗読にかさねるという。

齋藤真理子

鼎談

20数年のブランクの後、2年前あする恵子と再会。帯文、紹介文(裏表紙)の完成へと、ぶあつい草稿をとおしてその後ののえの、長くも切ない年月に直面する。

1982年夏、22歳で12歳ののえに、信州の『歴史を拓くはじめの家』で出会い、以後、胡瓜(きゅうり)という愛称でやんちゃな姉のように10代20代前半ののえとふれあった様子は、2章のⅡ部の何か所かに反映された。のえの発達障害説には思いあたる節があったという。

帯文で、この本を読むのを「登攀する」と言い換える人が何人も現れるほどに。「山と思っていなかったところにそびえ立つものを発見するために、かつて見たことのない見晴らしに息を呑むために」

韓国文学翻訳の第一人者。エッセイや本の解説も手がける。訳書にパク・ミンギョ『カステラ』ハン・ガン『ギリシャ語の時間』チョ・ナムジュ『82年生まれキム・ジヨン』など多数。近著のエッセイ集『本の葉にぶら下がる』では、縦糸の柔軟な感受性と横糸の豊かな発想と撚り糸のようなユーモアが織りなす世界に魅せられる。

超多忙な時間の合間をぬって駆けつけるこの鼎談では、韓国語の練達の顔とはまた違った、人生の大切な痕跡をそつとなぞる、切実な素顔に出会えることだろう。紹介文にある「この本はあなたの自由に関する本でもある」という境地にこそ押し出されて。

岩国英子

司会 & パーカッション

40年の陶歴を持つ陶芸家が、司会と共に、自作の陶製太鼓と木魚の演奏を、あする恵子の朗読にかさねる。存在感のある小柄な体とハスキーボイスで、5歳の時からの、のえの第二の母である。

Special thanks

ライブハウス曼荼羅、藤崎博治
ふえみん、小川明美、さなえ、ME、木嶋 剛
NDU、布川徹郎、金 稔万、若泉政人のえの写真を撮ってくださった方々
カンパに協力してくださった方々

生きかえった「うたうたいのえ」world 月よわたしを唄わせて・出版1周年記念Live

3月16日(土) 受付 5:00pm～

記念ハガキ・プロジェクトたよりをお渡しします。ドリンクや食事、本の販売も。しばしお待ちください。

I部 「うたうたいのえ」へのオマージュ

5:40pm～(100分)

♪最初の、のえの唄「ちっちゃな星」

- 『月よわたしを唄わせて』より、あする恵子の朗読と声の演奏
with Sax (末井 昭) パーカッション (岩国英子)

♪朗読との、のえの唄「お月さん」

▶ ゆかり対バン・かんちゃんのギター「ゆらぎ」と語り

♪まんなかの、のえの唄「木曜日」「月は知らんぷり」

休憩/7:20pm～(20分) ドリンクや食事、本の販売も

♪休んで聴く、のえの唄 BGMに

「朝でも夜でも」「ルー・ラ・ラ」ほか

II部 希望は生きのこる

7:40pm～(110分)

鼎談 語りて/末井 昭・斎藤真理子・あする恵子

- エピローグ 月を見上げると口ずさむ唄がある より参加者と共に、あする恵子の声の演奏
with Sax・パーカッション・ギター

♪最後の、のえの唄「ひとりぼっちの夜」「青」

NDU作『長居公園テント村に大輪の舞台が立った』より2分上映

※上演中の、撮影と録音はご遠慮ください。

※求む→グランドピアノあり、朗読中にアドリブで10分程弾ける、このLiveに思いのある方。



月よわたしを唄わせて

“かくれ発達障害”と共に
37年を駆けぬけた
「うたうたいのえ」の生と死

インパクト出版会
2022年11月刊・583p

読者の声さがざ波のように広がっています!! (敬称略)

- とてもつらい記録なのに、読み終えたとき彼女を抱きしめて、一生懸命生きてくれて、唄を遺してくれてありがとう…と伝えたくなった。(藤井 満)
- この本には多くの人をねぎらう力があると思います。生きづらい側もノコサレタ側も。自殺予防なんてファンタジーだという気さえします。のえさんがゴミ箱をけ飛ばすような何か所かでは爆笑しましたよ。(木嶋 剛)

- 容易に気づかれない発達障害がありながら、伸び伸びと育ったのえさんには、この社会はどんなに息苦しかったことか。(宮子あずさ)
- プロローグ、光いっぱい、と読み進めています。のえさんの人間性、魅力、文章からぐいぐいと感じ取っています。別れの会に至るまでの恵子さんの感情も。(水野スウ)
- 一気に色々な事が頭の中に起こって、消化に時間がかかりそうです。恵子さんの日本語の美しさには脱帽。まさに奏でるといった表現がピッタリなのではないかと思います。(村井みき)

※書店(荻窪 title、渋谷 青山ブックセンター、大阪 隆祥館書店、福井 わおん書房 など)やAmazonでも購入可能。

※このLive会場では本書『月よわたしを唄わせて』と末井 昭著『自殺』を販売します。

※ペロ亭への本書の申込(特典あり)と詳細については右の二次元バーコードへ



大切な出合いを深める、もうふたつの集い(定員10人・要予約・直前申込もOK)

【条件】 いずれも、本書を読み終えたか、記念Liveに参加した方。

【願い】 目を背けず、傷ついた生と死にそっと向き合い、人生のポジティブな宿題に変えられれば。

3月17日(日) 喫茶室ルノアール中野北口店My space

大切な人の自死でノコサレタとりわけ切実な当事者のわかちあいの集い 1:30pm～3:00

読書会風交流会 3:00pm～5:00

※参加費:1000円(ひとつでもふたつでも・スペース代シェアと飲食代は別途)

※申込は連絡先へ。お名前と携帯番号、あなたの大切な思いを必ず明記してください。

〈あする恵子・岩国英子が参加します〉

主催：リメンバーのえプロジェクト 企画・構成：あする恵子

皆さんのお力添えがもうひといき必要です!!→カンパ振込先 〈郵便振替 00780-9-42215 ペロ亭〉

注目!→東京新聞の一面と社会面に2月末以降、ふえみん2月15日号に、本書と記念Liveがトップ記事に